

隆瑜撰『五輪九字秘積拾要記』の研究(7)

福 田 亮 成

五輪九字秘積拾要記第三

『大正』一八・
九〇a 467/1

『寂記』に云う、『悉地軌』^三に云う、「**ㄨ**覽字は、宝部、心を主る。**ㄨ**覽字は、是れ大日の心地の種。火大の種子なり。三世諸仏の室宅なり。一切衆生の無始の無明、塵垢の妄執を焚焼し、菩提心の牙種を出生す。阿字の義を転積す。即ち是れ応化身の如来なり。実には是れ智法身、身は火生万タラなり。心は神を主り、其の形は鳥の如く、南方の火となす。火は夏を主る。其の色は赤なり。赤色は火従り生ず。火は木従り生ず。五陰の中の受陰の心は火を持す。受心は想心従り生ず。又心は赤氣及び肝従り生ず。心出ば舌として血を主る。血窮く乳となる。又耳を主る鼻喉・鼻梁・額頤等を転し、^{にがき}苦味い多く心に入れば、心を増し^ま肺を損う。若し心の中に神無ければ多く前後を忘失す。腎心を害す。病と

成るも若し水の火を尅するが如く、腎は強くして心弱し。当に心を腎に止め赤気を以て黒気を撰取すべし。心病は則ち差いえ、赤気とは字なり」已七。寂師所覽の軌は、現流軌と少々異有り。又秘釈文と出没は、対校して之を知れ。寂師解して云う、「**ま**字は是れ火大の種子の故に心を変じて云う。覽字室宅に至る『秘釈』廿四に云う、「**ま**字は是れ大日如来の智火、宝生の大悲福德身、万タラ火大の種子なり」文。五字異なりと雖も、皆な大日の種子なり。例えば秘密八印を皆な大日の印と云うが如く、故に大日如来の心地の種子と云う。一切諸仏は心の本不生を覺り、其の中に安住す、故に三世諸仏の室宅と云う文上。隆の云う、寂師弁疎なり。今、『秘釈』に文を改めて上の弥陀に准じ、大日・宝生同体の深義を含むか。何んとなれば、『印明決』空の下右七。今の三種悉地軌に、**みま**の真言は、大日及び請尊の請言なり。軌文の阿字金剛部より、**み**字虚空部迄の全文引き畢つて、私に云う、文に惣別両意有り。惣とは五字、惣じて大日真言とす。即ち大日如来智海、大日如来心地、大日如来寿量、大日如来無見頂相等と説く是れなり、此の大日とは、五種法身之中的の法界身、六不二の一大法身なり。別とは且く三意有り。一は阿鑊の二字。理智法身真言とす。此の理智法身とは、儀軌に説く所の胎金両部の法身なり。二は阿鑊藍の三字、次での如く法報応化の三身とす。三は**みま**等の五字、五部の真言とす、文相知り易し已。此の説委悉なり、其の中阿闍・宝生等は、五部の部主なり。同体深意とは、宝生仏は種子、**み**字は三形宝珠

なり、**𠄎**字は、**イ**は如と不可得、**𠄎**は塵垢不可得、**𠄎**は寂靜不可得、大涅槃なり。是の四字合成なり。是れ如とは法身義、菩提心を発し、如と寂靜の修行に依て涅槃即菩提果を得る。大涅槃三徳秘蔵海に入るなり。三徳とは、法身・般若・解脱、法報応三身なり。夫れ秘密蔵の極理なり。無尽莊嚴恒沙の万徳なり。是れ平等性智は即ち是れ修行句なり。又是れ恒沙已有なり。是れ則ち本有南方修行、本有恒沙の万徳なり。又是れ如々法身本有恒沙の万徳、菩提即涅槃 即生死なり。**𠄎**字塵染に還住す。是れ則ち**𠄎**字なり。**𠄎**種子、**𠄎**字なり。**イ**は字体となす、是れ自証三菩提の至極なり。**𠄎**字修行の義、如実道に乗じて来り、正覺を成ず。是れ万悲万行を以て有情を度す。如来一代の化儀は、此の行点に撰すなり。**𠄎**字涅槃の義、如来化縁の就いて。今、寂滅涅槃の理に帰る義なり。是れ如来非生非滅に**𠄎**字塵垢に還住す。如来大悲深重の故に五濁衆生のために、猶し舍利を留む。是れ方便究竟の至極、大悲利他の源底なり。今、**イ**字如々の理従り出でて**𠄎**字塵染に留り。**𠄎**字は未代の衆生の福田と成り。是を如意宝珠と号す。今、此の宝生尊は、南方福德門の尊なり。**𠄎**は即ち法身の舍利同体の義と知るべし。今、**𠄎**字を種子とすることは、**𠄎**字中の**𠄎**字なり。又『禮懺』の懺悔とは、南方宝生尊の三昧。種子は**𠄎**字なり。**イ**は三世なり。三毒なり。三界なり。三毒の当相即ち是れ如々無垢、三弁宝珠なり。之を実相の理と相応すと謂う。謂ゆる八万四千の煩惱実相を見、八万四千の宝聚門と成る。即ち是れ実

『興大全』七・
一一四一
『大正』三三二・
五七四c

『興大全』七・
一一四一
『大正』三九六・
六〇四a

相懺悔実義なり。凡そ三毒とは、猛火是れ一切罪の根本なり。又三毒の実相は、即ち是れ金剛の恵火なり。火を以て火を焼く。能焼・所焼同じく、是れ般若の大火聚なるが故に。更に能所を絶す。唯一実相なり。此等の意を以て梵燒等の御釈有るか。又今、宝生とは四身中の自受用なり。『遺教録』第一^{三十七}に配尺見るべし。又配釈中に多宝^文。宝生・多宝同体の義。『白宝口抄』宝生法下に之有り。煩を恐れて記せず。又阿闍某師とは、『秘抄問答』の同体の義^云披くべし。余残は後に記すべし。又『寂記』に云う。『梵燒一切等』とは、『秘釈』に、「一切衆生の無始の間隔、無明妄執の塵垢を梵燒し菩提心の芽種を出生す」^文。是は^イ字の功德を明すなり。無始間隔とは、謂く仏地所断の微細無明なり。『菩提心論』^{右十四}に云う。「今、真言行人は既に人法の上執を破して能く正しく真実を見るの智なりと雖も、或は無始の間隔のために未だ能く如来の一切智々を証すること能わざる故に、妙道を欲求し、次第を修持して凡徒り仏位に入る者なり」^文。『菩提の心芽を出生す』とは、謂く初発淨菩提心なり。初地菩提分に無明を断じ、心仏顕現す、之を生芽と謂う。第三の劫の『疏』に云う、「第三重微細の百六十心の煩惱業種の種を除いて、復た仏樹の芽生有るが故に、等虚空の無辺の一切仏法、此に依て相續生と曰う」^上。隆の云う、宝生仏は実相懺悔の三昧地なる故に文を改めて無始等と云う。実智とは、実相の智火なり。之を以て知るべし。寂師は少しく『秘釈』を疑う意か、是れ不可なり。『秘釈』は、次第証の義に非ず。故に又寂の云う、即ち是れ応化身とは、前の

西方を他受用とするに對して、南方を応化身とする。其の実は毘盧遮那の内智は、応に随つて流出す。故に実には是れ智法身と云う。『秘釈』に云う。「即ち是れ如来の福德之身、実智の火、貧窮の業因を焼いて、福德をして自在ならしむ」^上文。寂師の所存扱い難し。『秘釈』は軌を改め、『礼懺』は福德莊嚴身とす。是れ自受用身なり。故に実智火と云う。軌の文は、法報応三身に約して之を積す故に応化身と云う。然れども実には智法身と云う。是れ自受用なり、積文の岐を分たず、注するは未だ足らず。『寂記』に云う、**心軌主神**とは、神とは禪門に依らば、神は即ち舌識なりと。『大義』^上六に云う、「河上公は『老子』を注して云う、心は神を蔵す、『道経義』に云う、神は心に処し、神を火氣とす。『三才図会』に云う、図を出す下に注して云う、「神を丹元と名く、字は守靈心之状、朱雀の如し」^云。其形如とは、如の下、恐らく脱字有り。『秘釈』に、此の文無し。上の肝肺に准するに、是れ心の蔵形を指す、(隆の云う、寂師文異本なり、現流軌に如鳥文)。又寂師の心形図を出す、下に注して云う、心重ねて一十二両、干脊の第五椎に附着す。又云う、心色洛は心の下に在り、横は膜之上、豎は膜之下、横膜と相粘し而も黄脂□は、心なり、其の脂膜之外に細糸有り、絲の如し。心と肺相とは心色なり^上。『明堂図』に云う、「心形は未敷蓮花の如し。重十二両中に九孔三毛有り、精汁三合を盛り、脊の第五柱に附く。又云く、『内経』に曰う、「心とは君主之宮、神明焉を出す。心とは生之本神之變なり。其の華西に在り、是の克血脈に

在り、陽中之太陽となり、夏氣に通ず」文。又『大義』^{三六}に云う。「甲乙経に、舌は心の宮なり」文。『兵書』に、心は主守官たり。神明出るとは、火は南方の陽光暉、人君之象、神は身之君とし、君の南向して以て治するが如し。『易』に、「離を以て火とし、大陽之位に居し、人君之象・人之運動、情性作るは心に由らざること莫し。故に主守之宮とし、神明之出る所なり。『大義』^{四十六}に云う、『漢書』礼楽志に云う。人は天地陰陽之氣を含む。喜怒哀楽之情有り。『論衡』に曰う、人の五藏は心を以て主とす、心は智慧を発し而して四藏之に従う。肝は之が為に喜び、肺は之に属す。怒は腎は之が為に、哀に脾は之が為、樂しむ故に聖人、之を箝なば、性を傷けることを恐れて広く之を明す。寂師は云う、「朱雀は恐くは金翅鳥ならん。梵に^{五下}と云う。不動尊の火生三昧を^{五下}炎と云う。応に知るべし、金翅鳥は、即ち火之精なり。『疏』^{第三研八}に勇健の菩提心を釈する中に云う。「行者、心の明通を照見する時に、即ち無尽の大願に於て堅固力を得、乃至毘ルサナの金翅鳥王府して法界の大海を観ること明鏡を視るが如くして、止観の翹を奮つて人天の龍を^と持る。乃至勇健の菩提心なり」文。東方の木蔵菩提心を名けて龍と云う。大勇健の金翅は、本有菩提心の龍を食い、転じて明通となすこと猶し不動の^文字門、菩提之真金之鉢を焚して、淨菩提心をして顕現せしむるが如し、即ち是れ^{五下}火神の三昧なり。隆の云う、脆度信じ難し。何んとは、『大義』^{第四研九}に、民政政を論する。中^{三十五}に云う、「火は事を用うれば、則

『興大全』七・
一一四一

ち封疆を正し、田疇を修し、立夏に至て賢良を挙て、有徳を封し、有功を賞し、使を四方に出す。此れ火之化に順ず。万物を長養するなり。火を縦すること無ければ、則ち火随い、人用うるのみ。露降り、鳳凰来り、黄鵠見る。鳳凰は即ち朱雀之類、喜の故に出て見るのみ。露黄鵠は並子、其の母を慶ぶなり」文。寂の云う、**南方を火と為す**とは、『大義』第一右七に云う、「南方の火は赤色となす、以て盛陽炎□之状象るなり」。又云う注、「白虎通」に云う、「火之言となる化なり。陽氣事を用い万物變化す」。許慎が云う。「火とは炎上なり。其の字炎上る象形なる者なり。其の時夏」、尚書大伝に云う。「何を以て之を夏と謂う、夏は仮なり。仮とは方に万物を呼ぶ而して之を養う」。『釈名』に曰う、「夏は仮なりとは、仮にして万物を寛ひろ、生長せしむるなり。其の位南方なり」。『尚書大伝』に、「南は任なり、物の方に任ずるなり。内教の南方火大の義は具なり。上の南の下に弁するが如し」。**火は木従り生ず**とは、相生を明す、知るべし。隆の云う、『大義』二左二に云う、『白虎通』に云う、「木火を生ずとは、木の性温暖、火其の中に伏す、鑽灼して而と出ずる故に木火を生ず」文。『秘釈』に、「赤色従り火を生ず」とは、『大義』第三左初に云う、「火之精は赤なり」文。寂の云う、**受陰の心心を持す**とは、受は苦楽捨を鎮納するを義とす。ㄠ字火大、塵無塵到彼岸の義を具す。即ち苦楽捨と同じ。応に知るべし、火と受蘊と其の義相同なり。**受心は想心従り生ず**とは、想心を肺風となし、火は風に依て而も起る。故に従想心生と云うなり。**又心は赤氣等従り**とは、赤氣は、謂く

夏気心、火は肝木従り生ず。故に肝より生ずと云う。心出でて舌となりとは、此に三義有り。

『大義』^{下八}に云う、『甲乙』は舌を以て心に応ず。道家に舌を以て脾に応ず。管子は、心を以て下竅に応ず。『甲乙』は舌を以て心に応ずとは、凡そ身を資して命を養うこと五味に過たること莫し。弁了識知するは心に過たるは莫し。五味之入、猶し舌のことと之を知る。万事の是非は、猶し心のごとしと之を鑑る。心に限ること有ると欲するときは、舌陳べて舌必ず之を言う、故に心は舌に応ず。『道家』に「舌を以て脾に応ずとは、脾は陰なり」。『老子経』に、「地に人を飴うに五味を以て口従り入りて、胃に蔵る。舌之納る所は、則ち誠実有り、地体既に是れ質実なり。品味は皆な地の産する所の故に、舌と地と通ずるなり。『管子』に、「心は下竅に応ずとは、心は能く善悪を分別することを以て、下竅に通ず、滓穢を除く。○『甲乙』『素問』、是れ診侯之書の故に、行実従り而を弁ず。『道経』『管子』は各一家之趣を以てす文。血を主るとは、禪門に云う、心は血脈を生じ、心の色赤にして血に属すとは、以て神氣に通ず。其の道自然なり。『素問』に云う、「心とは生の本、神之變なり。其の花面に在り、其の氣血脈に在り、陽中之太陽となす。夏氣に通ず（心は君主の宮、神明号を出す。然して君主万物之に繋り以て興亡す。故に心とは生の本、神之變と曰うなり。火氣は炎生す。故に花面に在り、心は血を養い、其の脈を主る故に、氣血脈に在るなり。心は夏氣を主り、太陽に合す。太陽を以て夏火之中に居す故に、陽中の太陽は夏氣に通すと曰うなり）。又耳を主るとは、『秘釈』

に云う。又耳識を主る。鼻喉等を転じて等とは、心は是れ一身の主なる故に云うか^上。隆の云う、『大義』^{第四_{三六}条}に云う。「五蔵は心を主とす。余の四蔵は之に従う」^云。上に之を引く。若し爾らば寂師の言うが如きか。寂の云う。苦き味い多く心に入るとは、『大義』^{三_七条}に云う、『札記』に云う、夏の日、其の味は苦く、其の臭は焦し。火以て苦き所は、南方は長養を主る。苦は以て之を長養する所を、五味苦を須て乃以之を養う。『元命苞』に云う、「苦は勤苦乃能養なり。方言に苦は快なり。臭焦は陽氣蒸動火を燎するの気なり」。許慎が云う、「焦は火焼て物焦燃之氣有り、夏の氣同なり」。心を増し肺を損すとは、『大義』^{三_七条}に云う、河凶に云う、極めて苦きこと無し、心氣をして盛に肺氣をして哀めしめ、人をして果敢にして死に至り敵逆胸滿せしむ^上。隆の云く、『黄帝養生經』(『大義』^{第三_二条})に云う、「肺病には苦を禁す」。又云う、「肺病は糯米飯牛肉棗葵を食すこと宜し」^文。寂の云う。腎害心等とは、『素問』に云う。「其の主は腎なり」(主は謂く腎と相畏ることを主るなり。火は房水を畏る。水と官との故に腎を畏るを主る)。水の火を尅する若如く等とは、相尅を明す^上。隆の云う、『大義』^{二_四条}に云う、「水は火を尅るとは、衆寡に勝るなり」。又云う、「陽を君と為し、陰を臣となす、水は太陰之氣を以て太陽之火を制す」^文。当_三止とは、下に治法を明す、知るべし。『秘釈』に、心は花赤氣にして三角形有りとは、此は覺禪の文なり。上に述るが如し。第五の椎以下は、『内經』等の意なり。『大義』^{三_二条}に云う、「心病には変羊肉

杏薤を食すこと宜し」文。寂、私案に云う。心を梵に𠄎と云う。心は是れ𠄎之転声ならん。心に火の義を具す。𠄎は火なり。𠄎字を体となす。𠄎の字の形は、三角にして即ち心の形及び火形と同じ。𠄎は三なり。𠄎字を助け、火大三角の義と成る。謂ゆる法爾の字とは、豈に此のために非ずや。又、舌を和訓に志多と云うは、即ち𠄎なり。意ろ舌は心に通ずることを顕すなり。寂の云う、『悉地軌』^三に云う、「𠄎哈字は羯摩部、腎を主る。𠄎字即ち賀字の転なり。即ち是れ大日如来の常住の寿量、風大の種子なり。三解脱門、三際不可得の義なり。法身大力の万タラなり。風は則ち想陰の心の持する所なり。五蔵とは、肝・肺・心・脾・腎なり。胃とは六府の一名なり。胃は、此れ肚穀寔脾の腑なり。五蔵六府之海水穀、皆な胃に入る。五蔵六府は、皆な胃に稟て五味其の嘉に走る。淡味胃に入るが故に、腎は胃に稟るなり。腎は臍腰の下に在り、左を腎と名け、右を命門と名く。心腹に敷く

腎なり。窃に水精を写すなり。腎は志を主る。北方及水となる。水は冬を主る、其の色黒なり。五陰の中の行陰の心、水を持す。行水は受心従り生ず、受心は想従り生ず。腎は黒氣及び肺従り生ず、耳を主る。腎出でて骨となる、髓を主る。髓窮めて耳乳となる。骨窮めて齒となり、鹹味多く腎に入れば、腎を増し心を損す。若し腎の中に志無ければ多く悲哭す。脾腎を害して病を成ず。土水を尅すが若如く、脾強く賢く、腎は弱なれば、当に心を脾に止めて黒氣を以て黄氣を撰取すべし。腎病則ち差、黒氣とは字なり」文、軌文、寂師の本と現流

『大正』一九・
六一一b

『定弘大全』471/1
一〇一以下の
略文、『二教論』
下が正しい
『大正』三九・
六三三c

『大正』一八・
二〇七a
『大正』一八・
二七〇a

本と少々異有り。印点も対決して之を知れ。『秘釈』の「𠄎字上転声」とは、𠄎字点は𠄎字空点となり意味有り。下に至つて弁すべし。[「𠄎字上転声」とは、𠄎字点は𠄎字空点とすか。三五の摩多に通ず]とは、十六摩多の内、𠄎字一点上の如し。余の十五摩多を三五と云うか。則ち大日如来常住寿命とは、𠄎字を積す。謂く『礼懺』に云う、「常住三世淨妙法身」文。謂く常住三世とは、『教王経』上_右に云う、「大悲毘盧遮那常恒に三世に住せし、一切身口心の金剛如来」文。『撰真實経』上_右に云う、「大悲毘盧サナ如来、体性常住にして無始無終三業堅固なること猶し金剛の如し」文。『秘鍵』に云う「常に三世に於て不壊の化身を以て有情を利樂し、時として暫くと息むこと無し」文。常住の寿命、准んじて知るべし。[「𠄎字上転声」とは、𠄎字点は𠄎字空点とすか。三五の摩多に通ず]とは、十六摩多の内、𠄎字一点上の如し。余の十五摩多を三五と云うか。則ち大日如来常住寿命とは、𠄎字を積す。謂く『礼懺』に云う、「常住三世淨妙法身」文。謂く常住三世とは、『教王経』上_右に云う、「大悲毘盧遮那常恒に三世に住せし、一切身口心の金剛如来」文。『撰真實経』上_右に云う、「大悲毘盧サナ如来、体性常住にして無始無終三業堅固なること猶し金剛の如し」文。『秘鍵』に云う「常に三世に於て不壊の化身を以て有情を利樂し、時として暫くと息むこと無し」文。常住の寿命、准んじて知るべし。

『秘釈』の本地大悲風大の種子とは、按ずるに大日・釈同体の深意なり。『疏』第五_{行十四}に云う、「先ず釈迦牟尼を置け、○白蓮花に坐して、○此の白蓮花は即ち是れ中胎の淨法界藏なり。世尊は此の教を広く流布せしめんために、此の生身の幪幪を以て之を演説したまう。然して本の法界身と無二無別」文。上_右には、不空成就と釈迦を配し出す。今は唯だ釈迦のみなり。『心要』に、「釈迦牟尼とは、謂く不空成就之異名なり」文。此の意は、『理趣釈』_{行十四}に云う、「釈迦牟尼如来、○現に釈迦族姓の中に生じ、乃釈迦氏を性とす。牟尼とは、寂靜の義、身口意寂靜の故に牟尼と称す」文。八相成道は、即ち變化化身之恒軌なり。𠄎𠄎とは、𠄎は寂なり、𠄎は業なり、故に地神の偈に寂業師子と云う。凡そ一代の化儀は、皆な是れ涅槃

大寂 凡 字 中の所作なるが故 字 以て名くるなり。亦不空王と名く。不空は即ち師子の義。『疏』第一に、師子の義を釈して自在度人無空過の義と云う。又不空とは、凡 字の字輪の義、釈迦は字輪を以て其の体となすなり。藏品の帝釈真言釈に云う、凡 字 是れ百 凡 福德 凡 の義、百福德とは、即ち百字輪、百法明門なり。又第十八 凡 字 云う、「釈迦牟尼とは、即ち是れ不空見の身なり。普く世間に入りて而も仏業を作すが故なり。此の示す所は、即ち是れ牟尼の身なり。仏、仏事を作すとは、即ち此の釈迦は、毘ルサナの字 凡 字 輪従り而も 世間 出す。無二無別にして皆な一切処に遍せり、此の 凡 字 一字は 上点 空に同じ、本体 不生なるを以ての故に。当に知るべし、百字之身も亦 大空不生 是の如きなり」文。不空見とは、即ち不空成就の義なること（『疏拾要記』見弁）応に知るべし。凡 字 字輪は、即ち不空見なり、不空見は即ち不空成就なるが故に、其の義懸会するなり。案に、是の如き深義有る故に空点多種有る中に、今の点は、第十一点と云う。意、此に在るか。又寂師、解して云う、羯摩部とは、凡 字 は是れ北方不空成就尊の種子の故に、羯摩部と云う。『咩字』等とは、上成就の真言には、凡 字 に作る。中成就の真言には、凡 字 に作る故に其の異を弁ず。『大日如来常住』等とは、『秘尺』に云う、「則ち大日如来の常住の寿量、釈迦の本地、大悲風大の種子」文。凡 字 は風輪、黒色、大涅槃の色なり。故に如来常住寿量等と云う。第六 凡 字 云う、「黒は如来寿量常住之身なり。是の如き妙身は、畢竟無像なり、故に深玄色に作る」。又云う 凡 字 、「黒は、謂く大涅槃の義なり。

即ち是れ如来解脱之恵なり、是を恵色となす。北方釈迦は、大涅槃を主る。大涅槃は、即ち仏の自証なる故に、本地釈迦と云う、即ち本地の常見なり。故に『秘釈』に、「釈迦本地大悲等と云う」^上。隆の云く、寂師、無しと雖も同体の義を弁ぜず、愚意に任せて備足をなさず^矣。又上図に報音を配す。第六^{十四}に云う、「黒色は是れ鼓音如来の色なり」^文。具に『疏』の釈を見るべし。寂の云う、**三解脱**とは、二義有り。此の三は解脱に入る^{涅槃}之門なるが故に、三解脱門と名く。解脱之門、依主に名を立つ。『智度』第卅に云う、「請法実相は是れ涅槃城なり。涅槃城に三門有り、空・無相・無作なり」^文。又三解脱、即ち涅槃を名けて三解脱となす、是れ持業釈なり、又『論』に云う、「此の三法は涅槃なりと雖も、涅槃の因なるが故に、名けて涅槃となす。世間に因中に果を説くこと有り」^云。若し初義ならば、三解脱とは、所入門を挙げ、**三際不可得**とは、大涅槃とは、謂く諸法実相、不生不滅にして体三世に出する故に、三際不可得と云う。広の義は亦准じて知るべし。**法身大日万タラ**とは、**𑖀**字は是れ風輪・大力の義なり。故に大力万タラと云う。『秘釈』に云う、「羯摩身事業万タラ」^文。異義同じなり。**風は則ち想陰心の所持也**とは、**𑖀**字風の義を釈す。上の如く之を解す^上。隆の云く、『軌文』と『秘釈』と文相は異なるなり、義は一に帰すか。『秘釈』の意は、風は、五陰中肝^(肝風也)想陰の心と。只だ風と五陰に配すのみ。持の字の下に属し、五蔵六府を所持とす。軌の文は、持の字の上に属し、肺風鼓動の下、配風を持する故に、腎の生死海を成する

『興大全』七・
一一四二

『興大全』七・
一一四二

『興大全』七・
一一四二

472/2

ことを明す。又寂の云う、**五藏者**の下に、腎は臍腰の下に在り胃に稟るが故に、胃と腎と相関することを明すなり。**胃は脾腑に至る**とは、『秘尺』に云う、「胃とは六府の一名なり。胃は此れ肚、是れ脾の府なり」。言は、こころ胃は是れ肚腹、脾は五穀を入れ、胃は五穀を受ける故に、胃は是れ脾の府なり。『大義』三**六**に云う、「脾を胃に合し、胃を五穀の府とす。腎は膀胱と合す。膀胱を津液しんえき之府とす。又云う、「胃を五穀之府とするとすは、脾は只だ通ず、只だ五穀を入れて而も胃之を受く故に其の府とす。**五味走り其の嘉**とは、『秘尺』に、「五味各々走流して、其の嘉味、胃に入るが故に腎、腎は右を見るべし胃を稟するなり」^{上巳}。隆の云う、此の文に於て軌文及び寂師、点并并として難弁、然れども『秘尺』に淡字無きを好とす。『大義』三**五二**、『養生経』に云う、「五味口に入るや、各走る所有り。各病む所有り。酸は筋に走り、多く之を食えば人をして癢リウセケン鹹血ツカレヤマヒを走る。多く之を食えば、人をして渴せしむ。辛は氣に走る、多く之を食せば人として悪心せしむ、苦、骨を走る、多く之を食えば人をして変ぜしむ、耳は皮を走る、多く之を食えば人をして悪心せしむ。辛は散じ、酸は収め、耳は護し、苦は堅くし、鹹は濡す。五穀は養をなし、五菓は助とし、五畜は益とし、気味は合して而も之を腹す、四時五藏の宣する所に随うなり」^文。**左を腎と名け等**とは、『大義』第三**二**に云う、「八十一問に曰う、藏各一有り。腎独り両なる者は何んぞや、左は腎、右は命門。命門とは、精神之会する所なり」。『三才図会』に云う、「腎藏の歌精志自ら相随う腎藏対分、左は腎と

なる、右は命門となる。腎は志を蔵し、命門は精を蔵す。精完則ち志満。志満則ち精全、一の自然に随う、図を出す見るべし。『明堂図』、左右俱に腎と云う、命門と云わざるなり、尋ぬべし。寂の云う、寢水の精を写すなりとは、『秘尺』に云う、「窮きゆうしん寝して米精を写すなり、寢とは寢に作るべし。寢は寢に同じ、浸なり。米精は恐くは水精に作るを好とす、水精は即ち腎水なり。『素問』に云う、「腎又水を主る。五藏六府之精を受く。而も之を蔵む」。『秘尺』に云う「第十二推下の両方各一寸半に在り。腎は第十四推の両方各一寸半に在り」文記。隆の云う、胃字脱とは、『明堂図』に、胃は第十二推と云う故に、両方各一寸半とは、何に依るや、又此の分意通じ難し。愚按するに、『軌』に、腎は心腹に敷いて腎なり寢シを水精を写すとは、謂く腎は心腹をシツメテ胃より水精を写すと云う意か。胃には五味水穀を蔵して之有る故に、上に於て腎は胃を稟て云うが故に請て之を決す。寂の云う、北方及び水となるとは、『大義』一引に云う、「釈名・広雅・白虎通、皆な曰く、水は準なり、万物を平準す。『元命苞』に曰う、水之言となる演ウルテイなり、陰化淖濡流施潜行するなり、故に字を立る。兩人交りて一を以て中より出る者を水とし、一は教之始、兩人は男女に譬る、陰陽交を以て一を起すなり。水とは五行の始る焉、元氣之湊液なり、『管子』に云う、「水とは地之血氣、筋脈之通流するなり」。許真の云う、其の字泉の並び流して中に微陽之氣有るを象る。其の時は冬なり。『戸子』の云う、「冬は終なり。万物此に至り終蔵するなり」。『礼記』に云う、

『興大全』七・
一一四二

心受心従り生ずる」文。言わば行を水とし、受を火とす。此は水は火従り生ず、謂ゆる坎離既に濟なり^四、隆の云う、『大義』第四^三、「八卦を以て五行に配して云う、乾・兌を金とし、坎を水とし、震・巽を水とし、離を火とし、坤・艮を土とす。各方位を以て之を言う」文。広く之を明す、見るべし。黒氣及び肺従り生ずとは、黒氣は謂く水氣なり。肺は金なり。水は金従り生ず。是は生を明す。主耳とは、『元命苞』に云う、「腎発して耳となる」文。耳は腎之余なり、故に発して耳となると云う。又『道経』に、「精は耳に通ず」文。腎出でて骨と為り^五等とは、『秘尺』に、「乳を孔と作し、好となす」。『大義』には、此れ等の説無し。『素問』に云う、「其の花は髪に在り、其の充は骨に在り(脳とは髓^六之海、腎は骨髓を主る。髪は脳の養する所、故に華は髪に在り、充は骨に在り^四)。隆の云う、新本は乳字なり。古本は孔字なり。孔字無けれども本之有るなり、髓は骨の中の脂なり。鹹味多く腎に入ればとは、『大義』三^六に云う、『礼記』に云う、冬之日、其の味は鹹く、其の臭は朽^七なり。朽とは水之氣なり。有るが若く、無きが若く、言は氣の微なり。又云う、水は垢濁を受く、故に其の臭は腐朽なり。許慎が云う、朽爛之氣、北方氣同じ。此の味鹹とは、北方は物鹹之堅る所以なり。五味の鹹を得て乃の堅かるが如し。許慎が云う、「鹹は銜」『天命苞』に云う、「鹹は鎌なり、鎌は清なり、至寒之氣の故に其をして清めて而も鹹らしむるなり」。

腎を増し心を損すとは、『大義』三^七、「河凶」に云う、「人の食極めて鹹すること無し、腎

氣を盛にして心氣をして衰えしめ。人をして狂を發せしめ、喜んで血吐・血心神定ならず」文。

【若し腎の中等は、病を生ずることを明すなり】註。『止觀』八之一註に云う、「若し多く悲哭するは、是れ腎の中に志無きなり」文、【脾胃を害す】とは、『素問』に云う、「其の主は脾なり（水は土を畏れ、与に害となる故に、脾を畏れるを主るなり）」。

【若如】の下は、相尅を明す。【当止】の下は、

治法を明す、知るべし註。新本は腎を脾に作し。動潮は、腎字を是とし。古本及び軌は、心字なりを是とする矣。寂師、私に按ずるに云う、腎の藏、**ㄐ**字水大と、其の義相應せり。今之を明すとは、腎も亦梵語なり。是れ**ㄐ**字なるべし、何んとなれば、阿ミタを仁勝者と称す。

梵に**ㄐ**と云う、**ㄐ**字を空点とすれば声を転じて**ㄐ**と云う。又『義釈』の第七註に、**ㄐ**を勝生と云う。亦甘露と名く。**ㄐ**即ち甘露水にして**ㄐ**と異言、義同じなり。

故に知んぬ、腎即ち甘露水なり、又**ㄐ**は智なり、阿ミタは智惠門を主る。謂ゆる**ㄐ**大空智なり。外典にも、亦腎を五常の中の智に配す。内外一致なり。又腎を**ㄐ**没力合二と迦

と云うか」文。又『雜名』に云う、物力過迦と云う、過迦は是れ水なるが故に、腎甘露水と

異言同義なり。如来臍の真言釈に云う、阿没唎都ㄐ（甘露なり）。甘露とは智々の別名なり。能く身心熱悩を除くを得て而も之を服すれば、不老不死なり。以て如来之智に喩うるなり。

今、此の智を以て一切衆生の熱悩を除き、常住之身を得せしむ」文。**ㄐ**とは、甘露水なり。又は即ち智なるが故に智之別名と云う。能く身心の熱悩を除くは、即ち勝義なり。

不老不死常寿之身は、即ち無量寿なり。第四^註に云う、「西方に無量寿仏を觀る。此れは是れ如来方便智、○梵音^{ジニ}余仁^ニを名て仁者^ニとなす。又四魔を降すを以ての故に名けて勝者と^ニなす。故に偈に具に其の義を翻じて之を仁勝者と謂う」^云（仁とは即ち水大慈悲の義なり）。四魔を除くは、即ち身心の熱惱を除くなり。又腎に兩種有り、左は水、右を火となす。謂ゆる坎離、既に濟するなり。坎は水なり。離は火なり。火は智なり、水は定なり。**ㄐ**甘露とは、水にして智なるが故に、即ち是れ坎離、既に濟なり。坎離交れば則ち生ず。分れば則ち死す、稱して無量寿とするは、意は此に在りて内外一致、其の理異り無くまくのみ。水を和訓に美津と云う、謂く満なり。満は謂く満願なり、即ち無量寿方便智なり。第甘巻に云う、「成菩提は白色なり、即ち円明解脱之義なり、又水の義なり、我昔願う所、今は已に満足し、一切衆生を化して、皆な仏道に入らしむ。是の事をなす故に是れ大悲を起す故なり。又腎、耳を主るとは、謂ゆる觀自在尊の耳根円通は、**ㄐ**甘露の智水従り起る故に、亦腎出て耳となると云う。又『法花』に云う、「聞く、菩提を証す。菩提は即ち水なり。耳根従り而も証入するなり」^註。隆の云う、私の案を出すは、『秘釈』、**ㄐ**字種子を疑う意か。若し爾らば、軌^井に三藏配釈を疑うなり。律師に似合せざる料簡なり。元來『悉地軌』を真偽未決との疑心有る故なり。又寂の云う、『悉地軌』^{右四}に云う、「**ㄐ**欠字は虚空部、脾を主る。**ㄐ**字は則ち大日如来の無見頂相なり、五仏所証の大空智処にして寂滅真如の理

『興大全』七・
一一四二『大正』一九・
六〇七a
『興大全』七・
一一四二
『大正』三九・
六四四a

智なり、十方三世所証の菩提道場の殊勝の万タラなり。脾は、軌は意胃を主る、中央及び土となる。土は季夏を主る、其の色黄なり。黄色は地従り生ず。地は火従り生ず。前に説くが如し。五陰の中の識陰の心は地を持す。或は木の蔵となす、木は青し、是れ空なり。脾は黄氣及び心従り生じ、口を主り志一本となる。甘味多く脾に入り脾を増し、腎を損す。若し脾中に心無ければ多く廻惑す。肝は脾を害して病を成ず。若し木土を尅すが如し。肝強く脾弱し。根を意心を肝に止め黄氣を以て青氣を撰取するべし。脾病則ち差ゆ、黄氣とは地なり」文。寂師の解して云う、「**虚空部**とは、謂く中央の仏部なり、五行の中に於て亦脾を中となす故に、脾を主ると云う」。**無見頂相**とは、五字を五処に布する時、頂上は毘盧サナ**疋**字の所居なり。故に**疋**字は即ち大空無見頂相なり。**五仏所証の大空智処**とは、『秘尺』註六に云う、「五仏頂輪王大空智処と作す」。五仏頂は、即ち五智なるが故に五智如来頂と名くなり。是れ大空智処は、謂く五股なり。五股は即ち五智を表す。『理趣経(釈)』に云う、「以て上下十峯の金剛大空智処を成ず」。即ち是れ法界体性智なり。故に次に寂滅真如と云う。**寂滅真如**とは、五仏五字門法界体性なり。故に第六左十四に云う、「復次に世間の彩画は五色に過ぎず、然れども更相渉の種類の深淺不同有り。巧恵の者の之を分布するは、万像を出生して窮尽有ること無きが如く、法界不思議の色も亦復に是の如し。統すくて而して之を言えは、五字門に過ぎず、然れども亦更に相い發揮して種類の差別智印を成ず。如来普門の善巧を以て悲生万タラを

『興大全』七・
一一四二

475/1

図作し、乃至世間微塵数の随類形を出生して、猶し窮尽せざるがごとし。若し瑜伽行人、此の中の意を得る者は、当に類に触れて而も長し。自在に施為す。寂滅真如の中に当に何の次有るべし、淺深傷の中に説く所の如きは、且く一途の法門を諸作挙げ、其の綱領を撰するのみ」文。又『藏記』に云う、「**大智度論**真如とも法性とも観るべし」云。亦即ち是なり。真如とは、謂く五字の理なり。大空智処は、即ち五字智なり。五字は、理智不二の妙体なり。不二とは、不生不滅の中道、一実の境界。此に証入する者を、毘ルサナ真如法界智処中位と云う、故に十方世界所証の殊勝万タラと云う。是れ中智なるが故に菩提道場殊勝等と云う。

脾は胃を主り中央となす、及び土とは、脾を中とするを明すなり。

脾は胃を主るとは、脾は口に通ず、口に五穀の入る而も胃之を受く故に脾、胃を主ると云う。『秘尺』左六に云う、「脾の蔵は菴摩羅識を主る、中央となす」文。是れは内外の中央を相配するなり上。隆の云く、現本軌は主胃を主意に作る。寂師本は可なり。脾は胃と合するが故に。**中央及び土**等とは、『大義』第三初に云う、「中央の土は黄色なり。黄は地之色なり、故に天は玄にして而も地は黄なり」と。又云う第一左十『元命苞』に云う、「土の言となる吐なり。気精を含吐して万物を生ず」。許慎の云う、土は吐生するなり。王肅が云う、土とは地之別号なり、以て五行となすなり。許慎が云う、其の字二以て地の下に地之中に象なり、一直画を以て物初めし地を出るを象となる。其の時は季夏なり、光なり。万物此に

於て成就する、方に老を四時之季を主とす。故に老と曰うなり。黄色は地より生ずとは、『秘

尺秘に云う、「其色黄なり。孔字真金色なり。黄色は地従り木を生じ、木従り火を生ず」文。

黄色は是れ地の色なり。故に地従り生ずと云う。地は脾土なり。脾土は心火従り生ず。故に

相生の中には土生火と云う秘。隆の云う、『軌』には黄色は地従り生じ、地は火従り生ず。『秘

尺』、此に異なる。思按すべし云。寂の云う、『秘尺』は、恐くは写誤有らん云。隆の案に、

今は中央大日の色なる故に、五字互融に約して阿字真金色と云うか。(誠に愚按なり)、次の

従地生木等は、写誤有らんか。好本を尋ぬべし。但だ相の義は失無きか。然れども水生木

なり。今、地従り木を生ずるは、常と異なるなり。之に依て按ずるに、黄色は地従り生じ、

木は木従り火を生ずるの字、写誤有らんか。五陰の中等とは、世には地を中とし、内には

誠を中とす、故に誠は地を持すと云う。或は木蔵と為すとは、一解を拏て木蔵は謂く其の色

是れ青なり。虚空色と同じ。故に孔字を亦亦木蔵に配す。此の二義は次での如く東因・中

因の義を示すなり秘。隆の云う、『軌』并に『秘尺』は、正しく東因の義に約し積し、中因の

義を便とし、此れ等を以て知るべし。脾は黄色及び心従り生ずとは、黄気は即ち土気なり。

心は謂く心火なり。脾土は心火従り生ずるなり。口を主る志となるとは、『大義』第三秘に

云う。「志は口に通ず、口脣は脾之宮となるなり。又云う、脾を以て口に応ず、口は是れ出

納之門、脾は受盛之所となる。口能く論説し、脾能く消化す、故に以て相通す文。志とは、

『興大全』七、
一一四三
『興大全』七、
一一四三

是れ脾之神なり。脾即志の託する所なり。故に『大義』に云う、「脾は志を蔵す」。又云う、「志は土氣となる」文曰上。隆の云う、『軌』並に『秘尺』に、志の字を意と作す。或るが云う、意を正とす、下に無意神と云う故に、然も『止観』八之二一六に、「意は、腎を志となす、脾は意となる」。『秘尺』、軌文之に同じ、『大義』と異なり。然れば、寂師は文に任せて、腎を志神とし、此に至り脾を志するのは何んぞや、案ずるに『秘尺』、道竹の本の裏書に『止観』の文を出たり、見るに今は『止観』説に依ると見たり。此の一条追つて尋ねべし。又寂は、『三才図会』に出で、下に注して神名は常に字魂に在り、庭脾之状は神鳳の如し。胃の重さ二斤一両、大きき一尺五寸、長さ二尺六寸、径わたり五寸、紆う曲屈申穀二年、水一年五舛を盛る云。『明堂図』に云う、胃の重さ二斤十四両、紆曲屈伸長さ二尺六寸、大きき一尺五寸、径五寸穀は二年、水一斗五升を容る文。此れ正とす。又云う、『内経』に曰う、「胃は倉廩之官、五味官を出す。又曰う、胃は黄腸となす、五味口に入り胃に蔵す。以て五蔵を養う。胃は水穀之海、六府之大原なり。是れ以て五臓六府之氣味皆な胃に出ず文。

寂の云う、『梵語雜名』に風は余囀ホ余囀ホと名く、『山海経』に云う、丹穴之山に鳥有り。其の状鶴の如し、五彩にして文あり、名けて鳳と曰う、首の文を徳と曰う、翼の文を順と曰う、背の文を義と曰う、膺の文を仁と曰う、腹の文を信と曰う、是れ鳥なり。飲食して自ら歌い、自ら舞を見るときは、則ち天下大安寧なり。『韵会』に云う、「陸伽の云う、羽

翼三百六十鳳を之が長となす。又風鳥を鳳とす。衆鳥を惣ふる者なり。『京房易伝』に、鳳凰高さ丈二、『爾雅』は鷗鳳、『注疏』に瑞応の鳥なり。高さ六尺許り。『字彙』に、『孔海図』に云う、鳳は大椿となす。丹穴に生じ、梧桐に非ざれば棲まず。竹実たけのこに非ざれば食さず、醜泉うしづみに非ざれば飲まず、五色を備う、鳴くこと五音ごおんの中に、有道なるは則ち見え、飛ぶときは則ち群鳥。之に従り雄を鳳と曰い、雌を凰と曰う。天に在れば朱雀となす」文。羽翼うよく三百六十之長さとは、毘ルサナ万タラ王と相い同じ。徳・順・義・仁・信の五徳を具す、身に五色を具す、鳴くこと五首ごしゆに中る。即ち虚空は五色を具す。仏部・五智円満万徳具足と、其の義相応す。梵ぼんにぎんと云うは、恐くは是れ五色の光明の義なり。ぎんは光明なり、『最勝王経玄樞』第三に云う、「揚路荼、此に金翅鳥と云う」。『海龍王経』に、翻じて鳳凰となす。『経』に云う、「両翅相云うこと三百卅六万里、閻浮の上に其の一足を容する」文、此の説は『莊子』に謂ゆる大朋と相似なり。『決文後集』四十二に、『群書要語』に、朋及び鵬は皆な古文、鳳の字なり。朋鳥象形なり。鳳飛ぶとき群鳥従り万を以て数う故に鵬を以て朋黨の字となす。鳳即ち鵬鳥なり。今未だ詳かならず。

〔甘き味多く脾に入れば〕とは、『大義』第三八に云う。『礼記』に云う、「季の夏之曰、其の臭は甘し、其の臭は香し、土の味は以て甘き所なり。中央は中和なり」。『元命苞』に云う、「甘は食の常、言は其の味を安んず。甘味を五味之主とし、猶し土之和して四行と成るがごとし。臭香は土之積、気香を主となす。

『興大全』七・
一一四三

476/3

『興大全』七・
一一四三
『興大全』七・
一一四三
『大正』一八・
九一〇b

許慎が云う、土は中和之氣を得る、故に香しと。脾を増し腎を損すとは、『河図』第三^{三二}に

云う、「極めて甘すること無し、脾氣を盛に、腎氣あつて衰えしめるを人をして癡淫泄精、腹背痛に膿血を利せしむ。若し脾の中に心無ければとは、『秘尺』は此と同じ。心恐くは志

の字写誤か^上。隆の云う、寂師の所覧は異本なり。『秘尺』に意神と作す。『軌』も亦意の字なり、然れば、寂師の志字とすること不可なること上の如し。肝は脾を害してとは、『素問』

に云う、「其の主肝なり（土は木を畏れ為与に官となる故に施肝を畏るを主る）。隆の云う。当に心を肝に止めしむとは、或るが云う、「心を脾と作すこと可なり」^云。不可なり。

脾華は一葉黄色にして四隅有りとは、此は覺禪の文なり。覺禪の意は、五華藏を且く世間之五行方処に約して五花藏の相色を尺す故に、色は黄なり。四隅は相なり。花の色相なり、

乱すること無かれ^矣。五藏は蓮華の下に向うが如しとは、五藏は五花藏下の如しと^為言。又寂

記に云う、『悉地軌』^{左四}に、「内の五藏、外の五行に出でて形体と成る。此れ則ち各色なり。色は即ち四大、五根。名は即ち想・行等の四陰の心なり。則ち是れ日月・五星・十二宮・

二十八宿は人之体を成ず」^文。『秘尺』^{左二}に云う、「内の五藏、外の五行出でて形体と成る。此は即ち名色なり。色は即ち是れ五大・五根、名は想等の四陰心なり。色心は則ち是れ六

大法身なり。五智如来・五大菩薩・五大明王なり。凡そ日月・五星・十二宮・二十八宿は人体を成ず」^文。寂、解して云う、此は五字・五大は即ち六大法身なることを明す。

内五藏等とは、謂く法性の五字流出し、内の五藏・外の五行となし、各々の形体を成ず。外には山河草木等の形体を成じ、内には人等の形体を成じ、人等の形体を称して五蘊となす。五蘊を色心の二法に撰する故に、此は即ち名色なりと云う。色は即ち四陰等とは、色心の体を示す。色心は即ち六大なるが故に、五字・五大は即ち是れ六大なり。五智如来等とは、次での如く仏・金・蓮の三部なり。六大即ち是れ三部・五部なることを明すなり。凡そ日月等とは、一身の中に於て所当有るべし。今は詳かならず矣。且く字門に約さば、日月は、謂く**日月**の二字なり。五星は、即ち五阿なり。十二宮は、謂く十二摩多なり。廿八宿は、謂く二十は、謂く男声の二十字なり。八は即ち遍口の八字なり。惣じて二十八を成るなり。夫れ常途の教に説く法性は、空寂にして而も無相・無形にして第一義の中には仏、尚を不可得なり。豈に色等の諸法有らんや。今、此の宗の意は、爾らず。法性とは、謂く五字なり。五字は法爾にして仏の自作に非ず。亦他をして作さしめざる故に名けて無尽となす。其の形は、方・円・三角等。其の色は、黄・白等にして法爾に此れ等の形色を具す。故に即ち可軌となす。世の五行・五藏等の一切の諸法を成ず。法性、若し無相ならば、何に縁てか是の如き諸法を成ずるを得んや。法性とは、性をば不及に名く、法は謂く五字なり、即ち此れ可軌なり。亦は名けて法となす。此は即性即法なり。故に法性と名く。又法は、謂く差別世の五大等の諸法なり。性_五は、謂く彼の法が所依の体性なり。即ち法之

『定弘大全』
三・二・三

『大正』三九・
六九三c
477/2

性を法性と名く。此の二義は並に不及に約して積するなり。又世間の一切法は、本来無性に
にして乃至郝虚の如し。得べきこと有ること無し、故に名けて法性となす。即ち随縁之性、
法即性なり。是を以て随縁の声字及び方円等の形色は、法性従り起て、法性と無二無別に
して悉く是れ法身の仏の密名名字なり。故に宗家の云く、「諸の顕教の中には四大等を以
て非情とし、密教は此を説いて如来の三昧耶身となす」。故に字形及び三形を觀れば、自
然に法性に入り、毘ルサナの覺位を成じ、五蘊を動ぜず五分法身となす。若し法性無相無
形ならば、豈に是の如き成就を得ること有らんや。『疏』第十一叶に云う、「善男子、真言加
持力の故に法爾にして而も生じ、過越する所無し、三昧不越を以ての故にとは、謂ゆる真言
の悉地は本より来た成就せり。何を以ての故に、如来現に是の如くの法を証したまうによつ
て、謂ゆる阿字（不生正道）自体は本従り以来無量（空）の自在力（有）・不思議力（種智）を具足せり。此（即空寂無相）の悉地の体は常
住不變なり。但し行人自から了知せざるに由るが故に、是の如くの果を得ず。今、（此の行）
を以て其の身口意業を淨むるとき、若し能く法と相応すれば、即ち自から成就す。諸法自
爾にして終に虚しからず。○甚深不思議縁生理とは、若し真言の本体、先より成就せざれば、
則ち感に随つて而も応じて期限を失せざること能わず。若し真言に是の力有りと雖も、而
も行人の心行は未だ与（とも）に相応せざれば、則ち亦彼をして加持顯現せしむること能わず、然
るに縁会するとき（云）は自から成す」云。応に知るべし、縁会すれば自ら成するが故に、明す所の

『大正』三九・
六四六b『定弘大全』477/4
三・二六
『大正』一九・
六〇二a

五字等の法門は、即ち是れ修行進趣之往路、即身成仏之要津なり。夫れ即身成仏とは、此の身は是れ法爾の五輪なり。膝輪を地とし、乃至頂輪を虚空となす、是を即身と云う。此の身は是れ法性塔婆毘盧サナ三昧なり。然るを迷を以ての故に自ら生死流転の穢身なりとし、是を自ら棄となす故に。『文殊五字ノ頌』に云う、「或は一念を起し、我は是れ凡夫と言わば、三世の仏を謗するに同じ。法の中に重罪を結ぶ」云。諸仏の大智、此の理と照見するが故に、自在神力加持三昧に住し、而も五字甚深の法門を説き、身分に布せしむ。若し行人、心行、此れと相応して諸法本不生を覺り、則ち法性をして顕現せしめ、五蘊の当相は即ち是れ五分法身なり。之を成仏と謂う故に第六に云う、「我覚本不生とは、謂く自心は本従り以来不生なりと覺る。即ち是れ成仏なり。而実には無覚無成なり。一切衆生は是の如き常寂滅相を解せず、分別して妄に生死有りと云い、六趣に輪廻す。自出すること能わず。今、正法の高を聞けども還つて種々有為事迹に於て推求し、投計して妄りに成仏を冀く、何んぞ得る理有らんや」。又『即身義』に『法花軌』を引きて云う、「法身真如觀五字に入り、一縁一相等なること猶し虚空の如し、若し能く専注し無間に修習すれば、現生に則ち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫の福智の資糧を集得す」云。即ち是れ即身成仏なり上。寂師、文の大意を述べ、具に消釈せず、故に欠略を補わば、内の五蔵・外の五形等とは、『印明決』空下丁四に、「五字を法性内五大となす」。『五重結護』に曰う、「五大種子真言を觀る。○謂く凡

𠄎𠄎𠄎の字なり。其の位の所義、訓は別に在り、之を略す。本不生不可得・言説不可得・染淨不可得、因業不可得、等空不可得各互に五義を具す円融無礙なり。此の内の法性の五大なり。外の五大と其の性無二平等なり。所以に自身即ち法界、法界即ち自身、事々円融遍ぜざる所無し。『疏』十六_丁六に云う、「阿字は是れ金剛輪、成住金剛座に昇らんと欲するが為、先ず阿字を觀じて初となし、すなわ還ち_ハ金剛を以て而も金剛身也を持し、此の字を觀じて方形を作すべし。然して此の字の形体亦方なり。此の字の正方を觀じて金剛之黄色を作し、行者の内身に遍滿すること身之地大の遍ぜざる所無きが如し。次に水三昧を作さば、謂く縛字を觀じて円明にお在、其の色正白にして亦其の身に遍滿せり、然して此の字の形亦た円なり。前に阿字を觀じ已て一身に遍せり。今後に身に遍すること、猶し水大の遍く一身にうるお治して彼の地大と相妨げざるが如し。次に羅字を觀じて三角赤色と作せ。此の字即ち三角の形状を作る。囉字を亦猶し一切処に遍すること、猶し身中の火大の如し。次に訶字を觀じて倒なる半月之形に作せ、其の色黒なり。彼の字中身に在る色、又深黒なり。亦身に遍すること猶し身中の風大の如し。地・水・火・風は、是れ外境なり。外従り内を照す、即ち是れ阿縛羅訶の字なり。以て其の身身者に加す。此の阿は、即ち是れ法界之性なり。一切法本不生に似るが故に、即ち法界に同なり。阿字に似るが故に余の水火風も当に知るべし、亦是れ法界清淨之性なり」文。私に云う、自家六大無礙の義は、字門従り而して建立す。謂ゆる法性内

五大是れなり。然も法性内の五大と世間外の五大と無二無別なり。此の内外五大共に法界に遍ず。平等平等の故に法界即自身、自身即法界なり。問う、法性内五大と世間外五大と同異の相如何ん。答う、世間の外五大とは、且く器世間の如しとは、風水等の五輪は衆生の業に因て出す。是を以て『住心論』に曰く、「五輪は何に因てか出づる。衆生の業の然らしむるなり」云。是れ有漏なり、亦有為なり。今、五字門を以て五大を加う、即ち無為金剛不壊界と成る。『尊勝軌』に引く云。又『印明決』空中^{二十}に、不増不減の五字を説くを明す。『藏記』并『胎梵字次第』第六、『疏』八の文を引き已て、私に云う、三種悉の如しとは、五方・五大・五処・五輪・五智・五仏・五部・五蔵・五蘊・五根・五星・五色・五行、乃至五季等皆な説いて五字門となし一切法を摂す、開国松籥の告ぐ、『五行大義』第一^七に云う、「行を五と曰うは、万物を明すに数多なりと雖も数、五に過ぎざるを明す故に、天に在ては五星とし、其の神を五帝とす。孔子の曰う、昔、丘、諸老聃に聞く、云うに天に五行有り、木・金・水・火・土。其の神を之を五帝と謂う、地に在て五方とし、其の鎮を五岳とす。『物理論』に云う、「之を鎮するに五岳を以てすと。人に在ては五蔵となす。其の^{身中の身なり}□五官、黄帝の『素問』に云う、「五蔵の□は五官に在り、眼・耳・口・鼻・舌なり。五行□に相載し、体王相生し万物を生成す。過用休まず故に行と云うなり」云。問う、自宗の意は、五大之外に識大を立つ。謂ゆる六大無礙常瑜伽なり。之に依て『即身義』並に『大

『定弘大全』
四・六一
『定弘大全』
三・一九

『定弘大全』
三・二〇

『興大全』七・
一一四三

478/4

479/1

日経開題』は、六字を以て能造の体とす。何んぞ必ず五字を限り六字を用いざるや。答う、
『即身義』に、六大無礙の頌を釈せんがために我覚本不生乃至諸法本不生の偈を引証して、
因に種子を出して、**ヲイテミタカ**と曰う。後の**ミ**は経軌に其の説無しと雖も、大師始めて
大悲胎蔵八字の真言の初中を取り、彼の種子真言とす（『対受記』の意是の如し）。是れ則ち五
大に慮知之義有ることを表すために、且く識大種子を加え給うなり。況んや我覚本不生及
び諸法本不生の文に識大の句有りと雖も経疏に並に説て字旋陀羅尼と云う。『即身義』に亦
上の偈を釈して、此の頌偈は五仏の三摩地に約して是の如き説を作すと断ずる。而も密の
五大とは、五字・五仏なり、仏に既に六仏無し、誰に對してか六字を用うるや。之を思い
見るべし。『元瑜記』中三時に具に之を弁ぜり、見よ。〔六大法身〕とは、『東記』六年に云う、「六
大の位に人法教義・色心迷悟・一切の諸法悉く之を具す。体大に万徳有り、故に相・用二
大此の中自り出生す。若し六大無形・無形無人・無法にして能く一切の人法を生ぜば、所
生の四万・三密本無今有の無体有用の失、之有るべき故に、謂ゆる一切の色は五色を本と
なす。一切形は五形を本となす。是の如き五方・五季・五音・五字等一切の法の中に五法
を以て惣徳となす。此の五法各縁蘆を具す故に諸法に於て又識大有り。此の六大を諸法の
体性とす。若し仏境界に於て之を云えば、五仏是れ本なり。此の五仏を合して惣体と成す
故に毘ルサナ即ち六大法身なりと云う上。〔五智如來〕秘蔵の外弁すべしとは、自性輪身なり。〔五大〕等は、正法輪

身。五大明王は、教令輪身なり。亦仏蓮金の三部なり。三輪身の義は、『白宝口抄』『仁王經口決』を見るべし、凡そ日月五星等とは、隆の云う、『法鏡録』六科に云う、「夫れ以れば仏天遙かに非ず、心中にして則ち近し、星宿外に無し、身を棄てて何んか求めん。之に依て己身の府蔵を明め、本命之身土を顕さん。謂ゆる心上八分の肉団は、果中万從之星宿なり。八弁清浄之花をば蓮花台と名け、九重団円之方をば満月輪と号す。只だ是れ一心の中に於て而も胎蔵金剛之品を分ち、一体の上に於て而も素白丹赤之名を立つ。然れば則ち中宮辺輪は、是れ心王心数之妙閣。中台隅葉は、亦自性眷属之道場なり。当に知るべし、五蔵府の体相は、専ら輪円五智之仏体、天円地方の身骨は、併ら理智二界の万々なり。内に五智を証し、東西南北中と号し、光を和け、外には五形を示して、仁・義・礼・智・信と号して物を利す。天には五星を顕し、東には歳星さいせい、南には熒惑えいごく、西には大伯、北には辰星、中には鎮星是れなり。地には五神を現じ、左は青龍、右は白虎、前は朱雀、後は玄武、中には陳是れなり。然れば則ち五体不調を行ずれば、五行官神崇を成す。五常軌則を守れば、天地の神靈恵を垂る。是れ則ち天地に昇降無けれども、人倫に円通じ、上下に策すれども、ひそか潜に陰陽に亘るの故なり云。其の文、見るべし、隆の云う、八弁肉団は ㊦ にして、即ち色心にして、即ち両部なり。此の物体は即ち宮殿、樓閣、道場なり。之に由て五蔵六府は即ち五智仏体なり。当に知るべし、此の五智は五行・五星と顕る。其の根元 ㊦ の二心なり。是れ

行者の心身之外に星宿本尊をすべからず所以なり。又云う、陰陽とは、天地之法体。五星とは、五方之本主なり。日月は、陰陽之惣主、羅計とは日月之交蝕コウシヨクなり。本命七星とは、五星に日月を加う。当年九曜とは、七星に羅計ソエを副る。二六十二宮ニハツニシヨウとは、諸曜輪転ソエミカ之樓。四七二十八宿トヤリとは、衆星順之泊トヤリなり文。又云う、竊に以れば、日輪は、胎藏之樓閣。月輪は、金界之宮殿なり。蓮花部之覺王、月輪に入るを仏眼と号し、金剛部の遮那、日輪に入るを金輪と称す。又四智を遍輪に示し、四行を隅葉に表わす。又胎金不二之身・定恵一如之体、此を普賢延命と名く。又金剛薩埵は、倩ツラシク『秘決』を案ずるに、粗口ほぼ伝を思い。日曜とは、胎藏の大日、月輪とは、金界の覺王。羅族アツとは仏母、計都星とは、一字。五星とは、五仏等流之粧ヨソヅい。九執とは、九尊随類之容カタチ。或は医王薬師脇士の二尊、日月を顕わして東西し、或は弥陀の羽翼の両聖、昼夜を照して出入す。又七星は、七仏薬師之応迹・七母女天の別体なり。或は梵釈大弁四天王。或は大虚空藏、六観音異説是れ多く相伝区分れたり。乃至二六四七之宮宿、八封九宮之龜龍は、皆な是れ普門示現之尊形、応化随縁之妙体なり。然れば則ち内証至りて貴く、恩徳の高く九山の如く、外用殊に妙なり。弘誓深く八海の如し。是の故に一字金輪の下には北辰、北年不老之齡を譲り、仏眼部母の眼の前には七曜九執不死之業を授く。之に依て降臨の縁日を迎て事理之妙供を備え、相応の良辰を点して本迹之功德を讃ず。香花は浅略の供に非ず。中道実相之句におひ有り。茶葉は深秘の用を具す。醍醐甘

露之味を兼たり。然れば則ち一時の恭敬は遍く三世常怛之行に亘たり、一座の発動は、広く十方法界之供に及ぶ云。是の如き深義有るが故に、此に於て列し出すこと宜なり矣。是れ皆な法性之五字・五大を流出するなり。人の形体を成ずとは、北斗法、自宗に具わり、下に至つて託すべし。山嶋大地とは、現流の軌に嶋を海に作る、一本の軌には嶋に作る。『秘釈』に同じ、可なり。五字・五大の形色等、上に於て粗ほぼ之を記し已んぬ。凡字とは、地大、其の性堅なり。其の業用とは、持なり。本不生とは、遮情に約し、無自性の義なり。表徳義に依る。本不生とは、本有、始生の義にあらず。彼の諸法は法性に会し、塵々の当相、真理を表す。法爾の道理の故に名けて實際と本さく。之に依て一切の法生を見る時、直に本不生を見るなり。是れ従り前に能作の者無し。本有の体相始て生起するに非ず。故に本不生とは、空理無相に非ず。縁起の有相を取る。『大疏』に、「不生にして而も生なり、生にして而も不生なり、無相之相々常相なり」云。凡そ地大とは、凡字不生の故に亦不滅なり、不生不滅なるは、自から是れ不動轉の義なり。此れ不動の理に安住するは、諸法の本となす。此の凡字不生の理、形に顯るる時は、方質なり。四方均等の貌は、是れ安住不動勢力之諸法を任持する。悉く方形の徳なり。是れ則ち方形本不生の理と相応して義を顯すなり。堅の徳は、触塵多しと雖も、堅体は方法の所依と成て正しく身体に触受する。自然に堅の徳を成す。業用持の義とは、任持の義は独り堅の体を以て其の功を施す。是れ皆な凡字不生

の源理、事法に在り。各々業用を成じ、一々色相、一々作業、法性の徳用にあらざること無く、世間の事法の外に法性有りと云わば、是れ謬見にして秘密の境界に非ざるなり。

〔河海万流〕とは、現軌には江河流と作す。一本の軌には、江海万流と作す。『秘尺』は、江を河と改むるなり。凡そ言説とは尋伺観戲論に依らば起る、無分別の法性に於て更に意言の境に非ず、是の故に離言と云う、是れ遮情なり。表徳に依て能詮・所詮無二は能所を離ると、離言と云うなり。円形とは、不在一処・旋轉無窮の形なり。古徳は不住一録と云う、円珠を玉盤に安るが如し云。是れ則ち水性は器に随つて不定の貌なり、亦是れ言説無窮転之徳なり。善悪是非、一切の名言は義に随つて転用して而も窮尽有ること無し。彼の水は、法爾に円相を作し、海水・江河・井池・枝端・草顔・露湍・降雨等、皆な法然白爾の円体を表す。是れ㊦字言説無窮転法性なり。湿性とは、諸法に触著して撰して而も散ぜざらしむ。是れ則ち水気無降の故に方法に通徹して、内外に遍在す。是の故に他物をして一処に帰せしむ。此れ湿徳と云う。或は云う、水中の山島・大池・須弥等、皆な水大不散之徳なり。撰徳とは、湿の故に諸法一処に聚集して散失せず。故に撰取の義自ら有り。大師の言う、「妙高山八万由膽那、若し水大に能く之を撰する功無くんば風に随つて離散す」云。〔金玉珠寶等〕とは、『軌』に、珠を珍に作る。『印明決』空下三、『白宝吉祥天法』所引には珍に作るを好とす。金とは知るべし。玉とは惣じて玉を指すか。珍宝とは、別して夜叉玉趙氏の玉の如

きを指すか。[日月星辰]とは、知るべし。[火珠]とは、『秘蔵』下末^{三三}に云う、「日輪は五十一
踰繕那、下面是頗胝迦宝火珠所成なり。能く熱能照」文、『頌疏』十一^{三六}に云。見るべし。
案ずるに此の段は『俱舍論』の意か、尋ぬべし。[光明]とは、下に在り。義は上に通ずるなり。

ㄣ字とは、宝部南方の宝珠種子なり。塵即不可得に入る。離塵の義なり。離塵の故に如意
宝珠なり。火性とは、熱氣勇猛にして諸法に亘り、和合して法離散ならしむるを徳となす。
法の離散は、微塵是れ極なり。今、此の極微は即ち塵垢の体なり。諸の淨物は塵類に触る
れば垢穢と作す。ㄣ字塵垢の義、即ち是れ火体なり。塵類本より垢穢なるが故に、此の外
に垢有り、染之物無し。是の如く能染所を離て塵垢不可得と言う。今、此の火大は直に塵
垢となす。此の外に塵垢あつて此を穢さず、故に能所染を離る。煩惱即菩提、是れ離塵至
極と名く。又煖とは乾燥の義なり。寒氣は諸法と凝結す。若し煖氣に触れば必ず離散す。
是れ煖性の徳なり。又煖性至極すれば、熱氣と成り、熱氣は其の精を吐く。即ち是れ火大
なり。熱とは湿育の義なり。諸法の生ること必ず水氣の聚集に依る。若し火無く爛壞して
流注すべき、此の故に煖氣を施して其の体を壊せざればなり。[五穀万果等]とは、五穀は知る
べし、万菓とは菓実なり。ㄣ字門風大は、遠離因縁の法性なり。風とは、動の義、諸法の
離合不定にして彼此移転するは、即ち風大の徳なり。是れ則ち方法の氣出現する形なり、地・
水・火は法体の上の徳なり。此の風大は業用を取り、法界体性の業用にして縁用大の業に

非ず、外典に風とは天地の使り、陰陽の忿り云。皆な是れ色心諸法、因縁和合の成立する自性なり。長とは、長養生の徳なり。諸法増長は、風大の動転に依る。若し動転に寄て生長之義無し。即ち是れ因縁生の義、長養の業を成すなり。秀香美人等とは、軌と文字出沒有り、校すべし。知空等虚空の義とは、遮表二義有り、知るべし。青色とは衆色具足の義なり。五色の中に相違するは、黒白二色是れなり。今、黒白齊等に和合すれば即ち青色と成す。是の故に青色は黒白の中間に有りて却つて黒白を兼ね、爾に此の青色は光輝有り、是れ黄色なり。顕了分明なるは赤色なり。之に依て五色の中に衆色具足の義は青色殊勝たり。故に空の色とするなり。又団形とは、方円不二・衆形具足の形なり。上は三角、下は半月二相合して団形となる。若し五相渉入すと見れば、即ち是れ方円不二の貌なり。之に依て方円・三角・半月・団形具足円満すれば、即ち空輪・空字等空相法性に称して此の形を顕すなり。又表徳に約して即ち転円具足・無障無礙の故に空と名く。彼此の諸法全体遍収して互に異相無し、同一如々相として具せざること無し。故に虚空と云う。無礙とは、衆徳輪円の徳業なり。若し一縁増盛すれば余法に於て礙り有り。今己に衆相を合せる故に、無障礙の義を成す。皆な是れ空大法性と相応の作業を作るなり。無障等とは、彼の無礙に依て諸法に於て障を成ぜず。不障増長の縁と成じて万善を生長せしむ。皆な是れ空輪の徳なり。世間の草木及び情非情乃至法身の果位、皆な空輪無障礙の徳に依り展転増長、法界に周遍す、

是れ皆な空輪作業なり。是の如く空大の徳なる故に所生之法は黙して知るべし、是れ万善を生ぜしめ、世間草木情非情、此の徳に依て増長するが故に、其の中の滋味とは、『字典』に云う、「五味は、其の名『枹朴子』僊菜篇、移門子五味子を服して十六年、色は玉女の如し」文。此の説に依て滋味とは、顔色滋味増し、美女の如しと云う意ならん。

福徳高貴は**疋**字より莊嚴すとは、莊嚴とは、福智の二嚴なり。按ずるに、是れは此れ**疋**字虚空蔵の義ならん。『白宝口虚空蔵法』の下に云う、「撰真実経」には、胎蔵と号す。毘ルサナの胎には、福智の二嚴を含む故に、虚空蔵とは大日如来の福智門なり。第一義空を虚空蔵となす。福智之二種の珍宝を納れて一切衆生に施与する故に、仏境界の莊嚴三昧を成就する」云。又『五大虚空蔵法』下に云う、「五部肝心記」に云う、五大虚空蔵とは、地水火風空の五大なり。謂く法界に遍じて無所不至の体、是れ虚空の義なり。空は即ち依正の諸法皆な、悉く含蔵の故に蔵と云う。五大・五輪・五智・五仏・五性・五蔵・五音、皆な是れ方法の性融して五尊となるなり。故に五大・五行之四季の転成を以て五智・五部之法体となす、是れ生死流転之手法を改めずして、法性之源底とするなり。仍ち草木四季は発心修行等の五転の成仏、偏に五大虚空蔵の三摩地法門なり。惣じて天地に亘り、内外に通じ、情非情に遍じて此の法体性なり。自宗之草木成仏は、尤も此の法自り起るなり云。**疋**字意等とは、上來は五字と諸法と能所生を明す。以下は五字の徳と歎じ、中に阿字を挙ぐ、余

『定弘大全』
五・一三六『定弘大全』
五・一五一『定弘大全』
二・一七

字を準せしむるなり。『**九**字意等』は、『軌』の文なり。阿字の甚深の義は、大日経始終、本に帰す。阿字之一字を説く。『秘尺』第一項、『阿字秘尺』同第三三項、『一期大要』、阿字数多の深義を釈す。其の外、阿字觀等の釈、見るべし。『大例』第三初、略して之を出す。今の此の文は、『阿字秘尺』上_上七初に、『疏』第六_六缺に、「行者定中に本尊を觀じ、種々境界現前すること有らん。本所縁に依らず、皆な取らず。十縁生句を以て捨し、味著せず」。次に『尊勝義軌』左初に引く(今の文と同じ)。次に又『疏』第六_六年_年の文を引き、諸法空と觀じ、其の空病を遮する義を明し、次に『秘藏』本_本二に云う、「如_も、境界の中に海会の聖衆及び余の一切の事とを見ること、皆な十縁生句に入りて觀察すべし、信んぜずして而も之を信じ、唯だ当に每_{つね}心を本不生際に係けて、所觀の境に留まること無かるべし」文。未三に又云う、「十諭の觀に於て密嚴海会現前する時に、陽炎の如しと觀ずる、其の心如何んぞ。若し是れ至極なりと思わば其の意留著し、又満心を作す。譬えば鏡を磨く時、小さき影像を現ざるを見て、停留する時に実の鏡を成ぜざるが如し」文。次に第三疏を引く見るべし。次に瑜公私案に云う、今、此の十諭とは、出凡の至要、入仏之秘軌なり。儀軌には云う、之を取り、取るべからず。又捨之不可捨と云う。記の中には、不信而信と云う。又無念而念と云う。此の中に味い有り、心を留めて之を思え。迷えば則ち取捨俱に過なり。悟れば則ち遮表同徳なり。故に大師の言う、「迷悟已に在り、執無くして而も到る」_云。問う、取捨信不の義

を明すと雖も、猶し未だ其の意を詳にせず、重ねて請示し説かん。答う、率息に深義を述べ難し、聊か古徳の釈を出でて旨を示さん。実範上人の云う、「因縁生の法は、即ち是れ仮相なり、即ち是れ法界なり。若し仮相を見て至極とする時、則ち留著慢の過失有るが故に。所見の現の境を見て信すべからず、是れ法界は至極なり、是れ至極之極と信すべきを言う。仮相には留ること勿れ。当に心の至極に係るべし。本不生際は、即ち是れ法界の至徳なるが故に」文。又中丁初に云う、〔教行第九 大石 心月輪〕覚々上人の云う、「夫れ心理は色相を離る、色相は心理に非ず。知るべし、遮情遺迷之意なり。表徳顕之実義に非ず。色相に二有り。謂ゆる真妄・仮実是れなり。今、絶離する所は是れ妄仮を遮す。真実を遣すに非ず。妄仮と言うは、一心縁起之色相（顕の一乗の色相なり）、諸識所変之影像なり（三乗家之色なり）。真実と言うは、法身法爾之三色（顕形表なり）。性仏性然之四万なり（大三法羯なり）」文。此の釈に准んじ、若し遮情遺迷の色ならば、則ち信ぜずして捨てて取るべからず。若し表徳顕実之色ならば、則ち信じて而も取捨すべからず。謂ゆる性仏性然の四万とは、『疏』の中に「仏は謂く百千の衆事。刹は謂う浄処と云う是れなり。法仏法爾の三色とは、『疏』第六に云う、「畢竟無相にして而も一切相を具す是れなり。所以いかんとならば何ん。謂く直第二疏に、「諸法に約して其の心を識らしむ」文。故に百千衆事と云う。現覚の諸法は、本初不生なるが故に、畢竟無相等と云うなり。二義の中に前解は是れ浅し、顕家に符同するが故に。後の解は源なり、

『大正』一八・
一〇a

『興大全』七・
一一四四

大正図像部一・
八b

『定弘大全』
二・三一〇

『大正』一八・
四〇b

『興大全』七・
一一四四

『定弘大全』
二・三一〇

『興大全』七・
一一四四

永く余家に異なるが故に疑。更に按ずるに、甚深空寂とは、『阿字秘尺』中行に、「阿字に於て四重秘尺を出し、其の中第四重の釈を甚深空寂と云うか。『万法能生の理母』とは、『経』第二、入万タラ具縁真言品に云う、「阿字門は一切諸法本不生の故に」文。本不生とは、不生之生の故に万法の能生なり。『理』とは、諸法実相理体なり。『母』とは能生之喻なり。灌頂本源之智体」とは、『灌頂』とは、『秘藏記』未亡に云う、「灌とは諸仏大悲、頂とは上の義なり。菩薩初地より乃し等覺に至り、煩惱をして妙覺に遷る時、諸仏大悲水を以て頂に灌く、即ち因行円満して仏果を得証す。是れ頂の義なり。諸仏の大悲は是れ灌の義なり」文。『十住心論』第十釋に云う、「百字果相応品に云う、薄伽梵、大智灌頂に入りぬれば、即ち陀羅尼形を以て仏事を示現す」文。『字』は理智に通じ、中に今智体と云う、此の文を以て知るべし。凡そ灌頂の本源は、**𑖀𑖄𑖔𑖀𑖄**、呪は其の法の本なり。此の五字本に帰する阿字なり。其の義知るべし。灌頂の釈名、同表示の義、『印明決』地ノ卷釋に諸文を引きて釈す。往いて知れ。『余字亦復た如是』とは、按ずるに、『十住心論』第十釋下に具縁品の正文の文を引いて云う、「是の如き諸字門各々に十二転声の字を具す。〇一々の字門の五字は、即ち各々の門の五仏五智なり。是の如くの五仏、其の教無量なり。五仏は即ち心王、余尊は即ち心数なり。心王心数其の教無量なり」文。此等の意か。『凡そ毘盧遮那』等とは、以下本抛を指す。『大日経』は、広本は十万頌、略本は三千余頌七軸なり。然れども猶を略を以て広を撰し、小を以て

多を持す。一字の中に無辺の義を含む、一点の中に塵数の理を吞せり。広略異なりと雖も理致は一なり。『大日経開題』丁初に云う、「大毘盧遮那成仏神変加持経とは、是れ則ち諸仏之大秘、衆生の極なり。報応諸仏は秘して談せず。变化の如去は黙して答せず。補処弥勒菩薩大士、其の一人を識らず。飲光大如來薩埵は彼の逗留を聞かず、法界宮の中に秘主、寂を扣くの日、自在殿の内に密主庫を開くの朝の如くに至りては、心殿を発ひらいて而も珍財を示し、重関を除いて以て自楽を受て三等之理、彼此れ異なること無し。五智之覺人、我同じく得たり。座を起たずして金剛即ち是れ我心なり、三劫を経ずして法身即ち是れ我が身なり。三部の諸尊宛然として而も具し、三妄の衆降忽然として現んぜず。無量の福智求めざるに自ら備へ、無辺の通力いとなま營まざるに本より得たり」文。又云う、「阿等の字は法界之体性なり。四種法身、十界の依正とは、皆な是れ所造之相なり。六字は則ち能造之体なり。能造の阿等、法界に遍じて而も相応し、所造の依正帝網に比して而も無礙なり。此を往かざる、彼を来たらずと雖も、然れども猶し法爾瑜伽の故に能所無く而も能所なり。故に頌に曰く（六大無礙等の文を引く）云。今文深妙等の文、『開題』の文に依る、其の義炳然たり。又五字説処、諸流記有りと雖も、且く、中性院印信の口決に依る。『大日経』第三、悉地出現品の文を引く、具に疏釈等を出す。之を解し、往いて知れ。心化所説の大乗小乘等とは、『疏』第五三十四に云う、

「東方初門中に於て先ず釈迦牟尼を置く。身真金色にして并に光輝卅二相を具す。被る所の

『大正』一八・
一六七c

『定弘大全』
四・四六

『大正』一八・
九〇九c
『定弘大全』
四・六七

『大正』一八・
九一〇c

483/4

484/1

袈裟を乾陀色に作せ。白蓮花に坐して説法之状に作す。謂く左の手を以て袈裟の角を執し、今の阿育王の像の如くすべし。右の手指を竖てて空水輪を以て相い持す。是れ其の幞幟なり。此の白蓮花は、即ち是れ中胎の浄法界蔵なり。世尊、此の教を広く流布せしめんがための故に、此の生身の幞幟を以て而も之を演説したまう。然して本の法界身と無二無別なり」文。『聖位経』に云う、「真言タラ尼宗とは、一切如来秘奥之教、自覚聖智修証の法門なり。亦是れ一切如来の海会の壇に入り、菩薩の職位を受け、三界を超過して仏の教勅を受くる三摩地門なり」文。『大日経開題』^{年九}に云う、「此の経は是れ一切如来之秘要之蔵、大乘教に於て威徳特尊なること猶し千目の釈天の主となるがごとし」文。又『印明決』^{空下特}に、五字を以て大日及び諸尊の真言となる。『三種悉地軌』^{左初}に、「阿字金剛部主肝等」の文を引く。委くは上に弁ずるが如くなり。『金剛頂』とは、『金剛頂開題』^{左初}に云う、「金剛薩灌頂之時、三密の秘蔵は神光を燦して而も大虚と曙し。五智の大我は妙相に湛へて以て靈台に坐し。○輪王の種性秘密加持に非ずよりは、何が能く不思議之法を聞き、難信之教を信ぜん」文。五智は、即ち五字なり。又『十八会』^{丁四}を明す中に、第二会には**九**字門、染浄、有為無為無礙を明すなり。余の四字に一の阿字を帰す故に五字と同なり。又『印明決』^{水上年九}に云う、「三種悉地軌」^{年三}に曰う、「金剛頂経の五部の真言は、受持・誦誦し、理性を觀照すれば、人をして福を獲せしめ、骨堅く体は健く、永く災障及び諸の病苦無く、長寿を撰養す」文。此の中、五部真言とは、即ち

『大正』一八・
九二〇c

『大正』一八・
三三二a

『定弘大全』
四・八三

484/2

『興大全』七・
一一四四
『興大全』七・
一一四四
『大正』三九・
六四九c

阿鑊覽哈欠の五字なり。同『軌』左五に云う、「阿鑊覽哈欠、右五部の真言は、是れ一切衆生無生甘露珍漿」云。即ち知んぬ、『金剛頂經』に亦た此の真言を説て大日の明となす。故に『三摩地軌』に曰う、「法界体性三昧に入りて五字タラ尼を修習すと」云。塔印のみ両部に通するに非ず。五字を亦二界を兼たり。故に不二印明と曰うなり堀。此等の義に依て、今、採集簡要と云うなり。又『金剛頂經開題』右七に云う。「法身仏所説の教王は、能く一切の応化身所説の教王を撰す。法身所説とは、此の經是れなり。応化身所説の教王とは、謂ゆる諸の頭教是なり。自乘に於ては王の名を得て云うと雖も、而も法身自証の最勝頂教王の教に望れば、猶し粟散王等の輪王之所撰なるが如し」文。今、大乘小乗の一切の經典は唯だ五字に在ると云うか。若し一遍を誦すれば等とは、軌文の取意なり。但し軌文には誦誦と觀照との勝劣を明す。今は唯だ誦誦の辺のみを挙て觀照は次下に之を出す。軌と対比して知るべし。又按ずるに乃至し息災等とは、第七卷『疏』の意に依るか。軌に配すれば、軌の令人獲福等の文に、四種法を含むか、考うべし。第七右六に云う。「三昧耶の真言を挙げて、最初の阿字は本不生の義に似るが故に、即ち息災白の用有り。本不生を以ての故に、一切の功德具足して缺けること無ければ、即ち増益黄の用有り。本不生を以ての故に、無量の過失殄滅して余無ければ、即ち降伏赤の用有り。更に一法の本不生を出る者の無ければ、即ち撰召の用有り。是の如く本不生の中には所有の功具足衆徳無くして即ち能く一切の諸事を成弁す。阿字の如くは、

『大正』三九・
六五・a

『興大全』七・
一一四四
『大正』一八・
三二・a

余の一々の字も亦是の如し。一々の字の如きは、一々の名句及成立の相と皆な亦た是の如し。是の故に当に知るべし。即ち此の真言の中に一切の功用を具足する」文。『疏』は、**九**字の上の五種法なれども、余字を例する故に義を得て五字の義となる。又『疏』の文は、『遺教録』二二三九、阿字月輪觀の中に引て五種法を明し、之に依て按ずるに上の**乃至**の言、五字の功德無量無辺の故に乃至と云う。且く第七疏九に准せば、又云う。「行者自ら心を証する時の如きは、世出世間の因果本不生なりと了知するが故に、苦集滅道無くして而も一実諦のみ有り。此の一実諦を見已て必定師子吼して広く衆生のために之を説く。是を寛り(本不生)真実諦語を積集し修行すと名く。又八例の本不生を知るが故に、如来の念処を成ず。四如意足本不生を知るが故に、法性の神道を成じ、是処非処智等の本不生を知るが故に、仏の自然智力を成じ、六蔽の本不生を知るが故に、六度の彼岸に到る。七菩提分の本不生を知るが故に、七種の無師の覺宝を成じ、四梵住の本不生を知るが故に、無縁の慈悲喜捨を成じ、十八種の法の本不生を知るが故に、是の故に心量を出過し、一切衆生と共ならず、乃至種々の法門当に自在に之を説くべし」今且く阿字を約す文。此れ亦『遺教録』に引く。之に由て推するに、此に於て釈し給うべきを略するのみ。諸仏の通呪とは、上に弁ずるが如し。又五字真言・四種法の能成の印明法交空下十五に、具に出す。更に按ずるに今『秘尺』は、彼説と同じか。具に之を弁ずるか。**五印は薩埵之惣印**とは、此の句解し難し。其の本元は、『經』第五四秘密万タラ品の文なり。阿闍梨万タラを造らんがた

『興大全』七・
一一四四

485/1

『大正』一八・
九一^b

『興大全』七・
一一四四
『興大全』七・
一一四四
『興大全』七・
一一四四

めに五字嚴身觀を作す文なり。『疏』第十四^註に積す。『即身義』^七に之を引く。五輪成身の義を証したまうなり。今章の意は、此の五印を結んで次下金剛地以下觀照なり。大空位身秘密を成んがためなり。又章は『廣大軌』上^評の意に依り下に至つて追々文を引いて証すべし^矣。『五印』とは、『印明決』水下^七に云う、『法皇御次第』^{胎次第}、又口に、是の如く觀じ已て五輪契を以て之を加持す。先ず地輪（五胎下に散ぜず、帰命^欠を加う）。次に水輪（八葉下に散ぜず、帰命^鏝を加う）。次に火輪（法界生提、帰命^覽を加う）。次に風輪（転法輪上に帰命^哈を加う）。次に空輪（大恵力に帰命^欠を加う）。『金剛界御次第』に曰う。「阿尾羅咩^欠の字を用う。「腰腹心額頂に布す。次に率都婆印を結び、其の真言を誦し、四処を加持す。金剛手身となる。大日は是れなり」文。『五字嚴身抄』^{七十三}に之を出す。「薩埵惣印とは、隆の私に、裏出の意を以て按するに、無所不至の印を結ばんと欲す。五字を以て布字し、印を結び、呪を誦すれば、行者は全く薩埵身と成るべし。然して後に無所不至印を結び、即ち是れ大日なり。故に為金剛手身と云うか。故に今は惣印と云うならんか」。又『廣大軌』上^五に云う、「次に三昧耶を結び、復た法界生に入り、薩埵を以て甲冑を被るべし」文。此れは五印結前の惣印言なり。是を以て知んぬ。五印共惣印なるが故ならんか、尋ぬべし。『行者如是の如く等の下の五字にも無量の功德有るべし。誦持する者、其の功能を得るなり。此れ軌文の意なり。』**五仏髻珠**とは、五仏五智之宝珠と^為。『五智源底』とは、法性の五字より五智・五大等を流出する故に

『大正』三九・
六四四 a

『定弘大全』
五・一三六

『興大全』七・
一一四四

『定弘大全』
二・三三
四・六一

源底と云う。十方如来等とは、此は十方三世仏菩薩等の自利々他の理智等も、皆な此の五字
 自り生ず。是れ即ち諸法能造之故なり。第六^{五十四}に云う、「復た次に世間の如く五色に過ぎず。
 然るに更に相渉して種々の深淺不同有り。巧恵の者、之を分布して万像を出生し窮尽有る
 こと無し。法界不思議の色なり。亦復た是の如く統て而も五字門に過ぎずと言えは、然れ
 ば亦更に相に發揮して種々差別智印と成る。如来は普門の善巧を以て悲生万タラを図作す。
 乃至、世界微塵數随類之形を出生す。猶し窮尽せざるがごとし」文。又五字は即ち是れ真如
 なり。『藏記』に云う。「**五字**は、当に真如とも法性とも觀るべし」文。真如とは、
 謂く五字の理なり。大空智処は、即ち五字の智なり。五字とは、理智不二の妙体なり。不
 二とは、不生不滅一実の境界なり。故に十方如来の利生等と云うなり。加之六大等とは、
 上来広く五字流中の義に迷う。以下は宗の法相に就て其の義を明す。先の初に惣体・別相
 の義門に約す。六大^{四万}とは、『住心論』第一帰敬の序頌に、「歸命阿尾羅咩、最極大秘法
 界体」文。是れ六大種子、即ち六大法身諸法惣体なり。四万とは、『開題』に云う。「能造の
 阿字は法界に遍じて而も相応し」文。『日決』下^{十四}に云う。「能造の阿字とは、六大無礙の故に、
 互に六大法界に周遍して而も相応するなり」^五。此の釈に依らば能造は能造の中に於て相応し、
 而も相入するの義なり。且く此の解に就て今の文意を明さば、既に六大の伝に就て字・印・形
 の三秘身有り。故に六大同類の中に於て無礙し相応する之義有り。是れ則ち四万の惣体と

『興大全』七・
一一四四

485/4

『興大全』七・
一一四四

『興大全』七・
一一四四

『興大全』七・
一一四四

『大正』一八・
二〇a

『興大全』七・
一一四四

486/1

『大正』一八・
九一c

云う是れなり。[四身三密之別相]とは、上は惣体六大法身なり。是れ則ち別相阿闍等の四身なり。三密とは上は准んじ、四身所具の三密ならんか。[四聖六凡]等とは、以下所生、十界を明すに二の義門有り。先ず初の六凡・四聖の義門なり。六凡四聖とは、皆な五字自り流出する故に所帰と云わば、皆な以て五字に帰す。此れは能所を見る故に二重淺略なり。[五趣四生]とは、此は五凡・五聖の義門なり。是の如く二ヶの義門之不同を示さんがために、重ねて積するか。按ずるに四生の言は此に有ると雖も、義は上に通ずるか。[実相]とは、五趣四生は五字自り流出の故に、其の体全く五字実相一実の境なり。是れ一重の深意を示すなり。[四魔を降伏し]等とは、機能を歎ず。謂く五字に於て不思議功德有り。誦持・誦誦すれば四魔を伏し、解脱之果を得るなり。『大日經』大論第十一尺第三に云う。「爾の時、毘ルサナ世尊、復た降伏四魔金剛戲三昧に住し、四魔を降伏し、六趣を解脱し、一切智々を満足する金剛句を説けり」文、是れなり。『印明決』火下の卷註に、經疏并に儀軌等を引きて広く之を釈す。住いて見よ。[大]字は金剛の地等とは、上來は総持の功德を明し、五方を歎称し畢んぬ。以下は觀照に就て明す。軌平と大同なり。對比して知るべし。以下は『廣大軌』上平に依るなり。『軌』に云う。「次に阿字輪を觀ずべし。一切の仏加持したまう色は、黄色の聚るが如し。其の相普く四方にして等し。性破壊すべからず。金剛地輪と名く下体に於て加持せよ斷見。説いて瑜伽座と名く。即ち金剛宝界なり。彼の真言に曰う。帰命阿引、印は金剛惠の如し。真言と印の力に由て加持

『大正』三九・
七八a

『興大全』七・
一一四四

486/2

『興大全』七・
一一四四

すれば、瑜伽不壞金剛の座と成る」文。『疏』第十四_三に云う。「又此の瑜伽之坐は、其れ黄金剛の方輪、即ち是れ金剛之座なり」文。『法皇台』二卷、次第は『廣大軌』に依る。北輪五_す指を散ぜず。帰命に_ヲを加う(或は外五と云う)。
 云う。「次に金剛智を觀るべし。光明有情を照して同じく此の地を得せしむ。同体大悲の中より能く_ヲ字を生ず想を臍位に置け。白色にして相円明なり。月光九重にして輕霧の中に在るが如し。甘露水を流注して衆生界を充潤す。名けて定水輪となす。臍位を加持するが故に、名を大悲水と名く。彼の真言に曰く、「帰命して尾、印蓮花と同じ。真言の印の力、加持の威徳に由るが故に大悲三昧を得る」文。『二卷次第』に云う。「次に水輪八葉散、帰命に加う_ヲ」文。
 〔_ヲ字は金剛の火大日輪觀を成ず〕とは、『軌』に云う。「次に大悲定を觀ずべし。体は自性の恵と同じ。光淨にして本無_も垢なり。能く覽字を生ず。色は赤にして日暉の如し。三角にして威焰を生ず。名けて恵火輪となす。能く垢穢の障を除き加持して心位に在り。故に恵火威と称す。彼の真言に曰う、帰命_ヲ、印は大恵力に同じ。印明の力に由るが故に、加持して自性大実相の火輪と成る」文。『二卷』に云う。「次に火輪(法界生投、帰を加う_ヲ)。隆の云う、今、日輪觀を成ずる者は、謂ゆる『軌』に、色は赤、日暉の如し等の文を指して云うか。或は別に日輪觀を指すか。未だ相伝せず。又『軌』に、印同大恵力と云う故に直に大恵力には非ず。法界生印は、『疏』第十三_三に之を釈す。二頭立形三角の故に火輪印

『興大全』七・
一一四四

とも云うなり。『**ハ**字金剛惠等』とは、『軌』に云う、「自性の風を觀じ、惠光焰と鼓動し、能

く哈^{カン}字を生ず。形半月輪の如し。青黒にして威怒を生じ十方界を颺^{ヒヤク}動す。有情の因果の業

悉く皆な自性無し。性本^{もと}転解無し。解脱の風輪と成り加持して眉間に在て能く衆の悪魔を

壊す。故に解脱風輪と名く」文。彼の真言に曰う、「帰命哈^{カク}印、転法輪に同じ。印真言の力

に由て解脱風輪と成る」文。『二卷』に云う。「次に風輪（転法輪上に命を加う哈^カ）」文。『疏』

『興大全』七・
一一四四

十三^三に、転法輪印積す。『**ハ**字は金剛の定空大空觀を造す』等とは、『軌』に云う。「解脱の性を

觀ずべし。体空にして衆色を含む。真空、文字を生ずと想い、頂上に置く。色玄にして相

周普す。円満して十方に遍ぜり。名て大空輪となす。一切障礙無し。彼の真言に曰く、帰

命は欠^{ケム}、印は尊勝空を号す。真言印の力に由て加持して法界に等し」文。『二卷』に云う。

『興大全』七・
一一四四

次に空輪（大恵刀上、命欠^{ケム}の如し）。大恵刀、十三^三之を積す。『金剛定空』とは、解し難し。

『大正』一八・
九四五b

此の宗の定とは、『禅要』に云う。「次に心に三摩地を修すべし。言う所の三摩地とは、更

に別法無し。直に是れ一切衆生の自性清浄心なり。名を大円鏡智となす。上諸仏より下蠢

動に至るまで、悉く皆な同等にして増減有ること無し。但し無明妄相のために客塵の所覆、

是の故に生死に流転し作仏を得ず」文。寂師解して云う。此は常途の定の心所を三摩地を名

くと簡う。直に本性一心を指す故に別法無しと云う。別法とは、即ち常途の謂ゆる定の心

所を指す。是れは秘密不共之義なり。一切衆生等とは、正しく定体を指す。自性清浄心とは、

『大正』三九・
八一五 a

487/1

『大正』一八・
一八 b

487/2

『興大全』七・
一一四四

謂ゆる摩訶薩の意処ちよと、真実心なり。名づけて大円鏡智となすとは、此に亦二有り。一に大日円鏡、二に阿闍円鏡。今即ち初の義なり。謂ゆる法界体性、此を称して大円鏡と云う云。隆の云う、今、遊歩等の文を引合し、尤も其の謂有るか矣。又『金剛頂義決』に云う、「此の中の三昧耶とは、正翻は等持となす。三摩地とは正しくは等念とす(旧に等持と云う)。謂く一切処に遍じて等しく自智を持し、即ち一切如来智に入るなり。即ち一切普賢智に入り、此の智行を持し、猶し金剛の如く一切有情界に入る。平等に摂受して而も之を護念す」文。此の文を以て金剛定と云う。知るべし。又『大日経』第三出現品四に云う。「爾の時、世尊、復た三世無礙力の依たる、如来加持不思力の依たる、莊嚴清淨藏三昧に住したまう。即時に世尊、三摩鉢底中従り無尽界無速語表を出したまう。法界力と無等力と正等覚の信解とに依り。一音を以て四処に流出したまう。普く一切法界に遍じて、虚空と等しくして至らざる所無し。真言に曰く」云、此は無所不至の真言を説かんと欲して三昧に入るを明す。第十一『疏』に具に釈す。今、金剛定と云うは、此の定ならんか。何んとなれば、行者五字嚴身の觀を作し畢つて、第三重無所不至の印を結び、**咒むまゝ**の言を唱える義なるが故に知るべし。**大空觀**とは、不可得空觀なる故に大と云うなり。**大空位に遊歩して**等とは、合して此の文を引く意は解し難し。何んとなれば、此の文は即ち『即身義』二に、上來は金剛頂部を引て台藏部に約す文。引中、初は「悉地出現品」之疏文なり。次に第七卷供養法文を

引く。大師は、二經を合して御注有り。而も出現品の文、『疏』尺に依て、**々**字風万タラに於て得る所の悉地の相なり。『疏』尺に、世出世悉地有る中に成仏義の所引は、世間の悉地の中の神境通得益なり。然も宗家は、此の神境通を以て出世悉地の証としたまうなり。故に両祖の相違、彼等未积会合匠なることを知るべし。宗家は經の深義を約したまう。深義の意、元瑜『記』上五段に、之を弁ず。往いて知れ。此經所説等以下注尺なり。此の中に、初後の文を尺し、後(大金)に初文を解すなり、初注の釈は知んぬべし。大空位等とは、出現品之文を釈す。法身同大虚とは、謂く法身如來の大空と名くことは太虚空の、無礙・包含・常恒の三徳を具するが如く、法身の仏を亦復是の如く彼の三徳を具する故に、少分相似の義を以て比類するが故に、法身同太虚と云うなり。同とは分同の義なり。無礙とは、謂く周遍法界の義なり。一切の諸法、各此の理を具す。無礙渉入する故に、千灯の同時に照して而も障礙せざるごとし、是れ則ち法身大空の無礙の徳なり。含衆像とは、謂く虚空色含の徳なり。含は即ち含容の義、衆像は謂く森羅万像等なり。虚空は方法を含受し、法身は法界を含容す。其の義一なり。常恒とは、常住の徳なり。常とは、不生の故に、不増の故に。恒とは、不滅の故に、不減の故に、是れ本有常住の義なり。諸法之等は、是れ位字を尺す。位は即ち依止・依住の義なり。有為無為の諸の功德は法身に依止すれば、常に清淨なり。身秘密者等とは、疏家に異りして法仏三密を尺したまう故に、諸抄に多義有り。中の一義に

『興大全』七・
一一四四

『興大全』七・
一一四四

『大正』三九・
六二五b

有相三密は、各別と雖も無相の三密は、三密各に三密を具して挙一全収の故に。今の身密は、無相の三密に約する故に、身秘密を三密と尺するなり云。此の義好し。等覺十地等とは、身字の釈に当る。等覺十地とは天台・花嚴に約するか。隆の云う。宗家の尺の意に依て、今は引合するなり。謂く神変自在大空三昧に遊歩し、無相三密の果を成すを言とす。
 [是れ則ち無生甘露等とは、觀門徳を鑽ず。無生甘露とは、会疏三十二二十三『涅槃經』第卅一加護云う。「云何なるか一名に無量の名を説く。猶し涅槃の如し。亦涅槃と名く。亦無生と名く。亦是無出と名く。○亦是廣大と名く。亦是甘露と名く等」文。醍醐仏性とは、第四右廿九に万タラの義を釈して云う。「淨妙之味共相和合して余物の雜すること能わざる所なり。故に聚集の義有り、是の故に仏、極無比味無過上味なり。是の説の万タラとなすを言たまう。三種秘密方便を以て衆生の仏性之乳を攪揺して、乃至五味を経歴し、妙覺の醍醐を成じ、醇淨融妙にして復た増すべからず。一切の金剛智印、同じく共に集会して、真常不變の甘露味に於て最も第一なり。是を万タラとなすなり」文。此の釈の意なり。此の文に依て極字好となす。
 [一字五蔵に入る等とは、以下『軌釈』に准ずれば、誦持と觀照との勝劣を明す。謂く如法に誦持して数息に随い、一字五蔵に入り万病不生なり。況んや日月輪を觀じ、凡身即仏すと為言。
 『印明決』識卷右五に、『軌』右六の文。并に『軌』右五、「一字五蔵に入りて万病不生なり。況んや日觀・月觀を修し、即時に仏身空寂を証得す」文。引畢つて、私に云う、觀に且く二種有り、一に

字輪觀、二に嚴身觀なり。今、日觀・月觀と言うは、五字嚴身に約すか。『軌』左五に、阿金剛地部等の文を引き畢つて、五字の字輪并に嚴身觀の次第を明すに、『延命院胎藏次第』を引き、初に五字の字輪觀、次に五字嚴身の布字觀なり。次に即ち想え、法性内五大と、世界外の五大と無二無別なり。法界の五大は、自身の五大と無二無別の故に、法界即自身、自身即法界なり。戒暗定暗慧解脫含解脫見次。(隆の云う、『軌』并に秘尺に此の配屬無しと雖も用うべしか。『大軌』に此の意有る故に)。此れ即ち五分法身なり。自身即五分法身の故に法界亦五分法身なり。所以に無二平等なり。無二平等の故に一切衆生身に五分法身を備えざること無し。所以に一切衆生の身、亦無二平等なり。故に一成一切成と曰う。所以に仏界衆生界無二平等なり。即ち想え、毘ルサナ法界率都婆身なり。一切衆生乃至非情、草木も亦法界性率都婆身に同なり云。隆の性心帰意の按に、『軌』并に『秘釈』の嚴身觀、今時用うべき様を教示するならんか、九思せよ。因に云う、『廣大軌』右七に、「六大印を印尊勝空と云う」文。『秘抄』下尊勝『舜抄』に軌の文を引き、尊勝宮と作し、故に悉順通三校合して空字を正となす。『印明決』識卷十四に軌の文を略して引いて云う。「尊勝空は即ち無所不至の印なり。正く団形空を表すなり」文。『法皇台』二卷に、開山に口決有り。彼に云う、「団形衆色勝義空」文。空の字正となすを決すべし。